

円地文子全集

第十六卷



田地文子全集

第十六卷

新潮社



第十六回配本(全十六卷)

円地文子全集 第十六卷

定価三三〇〇円

昭和五十三年十二月十五日 印刷
昭和五十三年十二月二十日 発行

著 者 円地文子 © Fumiko Enchi, Printed in Japan 1978.

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号一六二 東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部 東京(〇三)二六六一五一一

編集部 東京(〇三)二六六一五四一一

振替 東京四一八〇八番

印刷所 東洋印刷株式会社

製本所 神田加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。
送料小社負担にてお取替いたします。

円地文子全集 第十六卷 目次

灯を恋う

I

先生と呼ぶ名の故人	13
岡本綺堂と小山内薫	13
長谷川時雨と「女人藝術」	16
高楠順次郎	18
阿部真之助	19
源氏物語に架けた橋	20
谷崎潤一郎の文学と女性	25
谷崎文学における恋愛	32
谷崎文学と地方色	33
熱海での谷崎先生	35
高見さんのこと	37
漱石雑感	41
私と文学の間	42

小説の世界

古典とともに

私と古典

『問はずがたり』によせて

近松の浄瑠璃

読本と草双紙私語

私の小説作法

『女坂』の舞台

II

舞台の面影

先代 中村鷹治郎

先代 実川延若

先代 中村雀右衛門

先代 尾上梅幸

先代 市川左団次

小説の世界	47
古典とともに	49
私と古典	50
『問はずがたり』によせて	52
近松の浄瑠璃	53
読本と草双紙私語	57
私の小説作法	60
『女坂』の舞台	61
舞台の面影	64
先代 中村鷹治郎	64
先代 実川延若	66
先代 中村雀右衛門	67
先代 尾上梅幸	68
先代 市川左団次	69

庭	蛇	冬の柳	松	気になること	一分の長さ	悪人というもの	松縁という俳優	新派の女形最後の人	先代 沢村宗十郎	六代目 尾上菊五郎	先々代 市川羽左衛門	井上正夫	喜多村縁郎	先代 市川中車	先代 市川松蔭
90	88	87	86	84	82	81	79	76	75	75	74	73	73	71	70

浄瑠璃寺の吉祥天女	室生寺	京都と奈良	法然院	長谷寺の牡丹	京の旅	技巧的な自然 (尾道)	瀬戸内の寺	竹生島の桃山美術	小谷城趾とお市の方	III	メソポタミア秘宝をみて	ちゃんちゃんこ	切山椒	庭の今昔
123	120	119	117	116	114	111	108	104	100		97	96	95	92

奈良の鹿

鞆の浦晚春

讃岐から阿波へ

松島

梅雨時の旅

ヨーロッパのくだもの

ヨーロッパの木

本のなかの歲月

I

座右の書

私の第一戯曲集

築地小劇場附近

忘れえぬこと

谷中清水町の坂

物語の書出し

物語と短篇

作品の背景

私のなかの月

私と歌舞伎

墨染讀

若い頃に見た絵

古典と私

小説の題名

『嵐が丘』について

ドストイェフスキーと私

II

女の書く男

光源氏と六條の院

『源氏物語』出版後あれこれ

124

125

130

136

138

139

141

147

148

150

151

152

153

157

158

159

165

167

168

171

172

174

177

179

182

三島由紀夫の死	250
三島由紀夫の戯曲	253
三島由紀夫の思い出	254
『舞姫』について	256
オスローの川端さん	257
川端さんの死	258
『日本の美のこころ』について	261
尾崎一雄さん	264
吉川幸次郎博士についての私記	269
塚本憲甫先生追憶	271
ことばという器	275
言葉の響き	277
男言葉と女言葉	279

源氏物語私見

源氏物語私見	283
桐壺に見る恋愛	285
空蟬の顔かたち	286
夕顔と遊女性	289
恋人の位	291
賢木の巻	293
朝顔の斎院	295
源氏物語の端場	297
源典侍考	299
「われながらかたじけなし」の思想	302
頭中将考	308
女にて見奉らまほし	310
光源氏と初、中、後の恋	314
恋の仲立ち	314

年上の女	317
紫の上のヒロイン性	319
近江の君の滑稽味	321
罪の意識について	323
女二の宮	332
ホームドラマ	334
歌のない女	336
六條御息所考	338
三人の女主人公 (匂宮・紅梅・竹河)	353
「宇治十帖」についての私疑	356
仮名文の文体など	362
口語訳の言葉あれこれ	366
源氏物語紀行	369
住吉詣で	369

住吉と遊女	371
嵯峨あたり	373
光源氏のモデル	376
作者の声	378
『源氏物語』の作者	381
『八犬伝』の作者	391
解題	399
主要著書一覧	405
年譜	439

円地文子全集 第十六卷

灯を恋う

I

先生と呼ぶ名の故人

岡本綺堂と小山内薫

野上弥生子夫人は先生と呼ばれることをひどくきらって、ついそういう呼び方をする、その度にお叱言を頂戴する。中国人のいう先生も、国会議員を事務局や地元の人と呼ぶ先生も、ほんとうに師と仰いでいうつもりではさらさらない一種の社交語なのだから、野上夫人もそう思っておあきらめになる方がいいと私は思っているが、『秀吉と利休』の作者は頑としてインチキ先生の称号を受けつけられないのである。

しかし私なども年をとるにつれて、先生という名で呼ぶ附合の方がだんだん数すくなくなつて、地下に眠つていられる先生の方が多くなつた。墓参のつもりでそういう方達のなつかしい面影を思い出して見るのも忍ぶ草を摘むよ

すがとなろうか。

岡本綺堂先生は亡くなられてもう二十数年になる。私は、少女時代、先代の市川左団次のファンでよく本郷座や明治座を見に行ったが、そのころの演目に大抵一つは綺堂物の新作が混つていた。私がファンになったころはもう左団次は人気俳優になつていたが、その基礎を作つたのは、綺堂先生の新作戯曲の上演によつてであつたらしい。今も歌舞伎のレパートリーになつてゐる『修禪寺物語』『鳥辺山心中』『番町血屋敷』などは皆この時代に綺堂先生と左団次の結びつきによつて生れた傑作である。

芝居に夢中になつてゐる演劇少女の常道を踏んで私も、十七、八ごろから戯曲を書きたいと思ふようになり、家族に置いてこそそ原稿用紙を書き崩しはじめていたが、二、三年後に、岡本先生と小山内薫先生が選者であつた演劇雑誌の懸賞戯曲に一幕物の喜劇が当選した。

戯曲を勉強して行く足がかりを探していた私は、当選それ自身よりも、岡先生に兎も角名を知つて頂けたのが何よりうれしくて、綺堂先生のところへ一人で出かけて行った。そのころ先生は震災後に建てられた麴町元園町の木口の新らしい家に住つていられた。

小娘の私が紹介もなしに訪ねて行ったのに快く逢って下さって、しばらくお話ししたが、それまでに愛読した『半七捕物帖』などで漠然と想像していた下町風の気さくな江戸ッ子風ではなく、むしろ無愛想な方であった。笑われる時語尾の神経的に慄える特徴があった。私が戯曲を見て頂きたいという時、今は弟子が多いし、もうこれ以上ふやしたくないから断わると言われた。それでも諦められないで、岡崎三郎信康の死を書いた戯曲をその次に持って行ったら、折角持ってきたものだからこれだけは見て上げると言われて、数日後に長い批評の手紙をつけて送って下さった。

その手紙も戦災で焼いてしまっただけでも、たしか私がそのころ真山青果氏の史劇に心酔していて、対坐したまま、長々と会話をつづける場面があるのと、史実を勝手に変改しているのをきびしく戒めた手紙であったと覚えている。

後で岡田禎子さんにきくと、このきびしい批評は岡本先生が入門志願者に対して最初に必ず取られる方法だったそうで、そこを乗り越えて来るものだけを弟子にされたのだそうであるが、生意気ざかりの私は先生の批判に、自分なりの抗議もあってとうとうその後作品をお見せすることとはしないでしまった。

岡本先生は初対面の時、私に、「小山内君でも岡(鬼太郎)君でも逢うと私と違つて愛想のいい人ですよ」

といわれた。ご自分でも世辞愛嬌を好まない、社交的でない気質を認めていられたのであろう。しかしその半面に友人にもお弟子さんにも、実に篤実な変らない情誼を持つていられた。先生の門下の結果に舞台社があり、今の北條秀司氏などもその出身であるが、綺堂先生のような江戸ッ子気質のあることを割に現代の人は知らないらしい。

先生の生家は幕臣であられたというが、若くして新聞記者となり、劇場の座附作者もなされ、もちろん狹斜の巷に出入りすることも多く、いわゆる粹人になつても不思議のない境遇であつたのに、真面目一方……いい意味の野暮を一生立て通された気質には尊敬すべきものがあり、一面、先代左団次の人柄とも通うものがあつたかも知れない。

綺堂先生は若いころ榎本虎彦氏と共に福地桜痴の門に入り、歌舞伎座の作者部屋にいられたことがあつて歌舞伎劇に附随する音楽、衣裳、舞台装置等万端に明るかつた。脚本を書く場合には舞台と俳優を頭に置いて、正確な配置で作劇されたが、それだけに劇場側の都合でセリフを変えたり、場面を縮めたりするようなことには頑として応じられなかつた。ある時、先代の歌右衛門かの都合で一幕をカットするという話の来た時、それならば上演を許可しないと本気ではね返されたそうである。先生の場合には頑固というのではなく、ちゃんと出来るように書いてある芝居を俳優のわがままで変えるのが許せなかつたのであろう。その